

画像からみた脳梗塞と神経心理学

田川 皓一●著

前東北大学院教授・高次機能障害学 山鳥 重

本書は280頁もの大著で、それもなんと全編書き下ろしである。

著者の田川皓一先生は誰もがご存知の脳卒中学と神経心理学の権威である。医師・研究者としてのすべてのエネルギーをこの分野の知見の深化と発展のために捧げてこられた。脳卒中症例に関する臨床経験の豊富さにおいて、先生の右に出る人はおそらくいないのではなかろうか。

脳卒中の症候学で最も厄介なのは認知・行動能力の異常、いわゆる神経心理学的症候である。単純で比較的わかりやすい症候もあるにはあるが、複数の認知的要因が重なり合い、わかりにくい臨床像を呈することのほうがむしろ普通と言ってもよいくらいで、多くの医師から「わかりにくい」領域として敬遠される原因の1つにもなってきた。

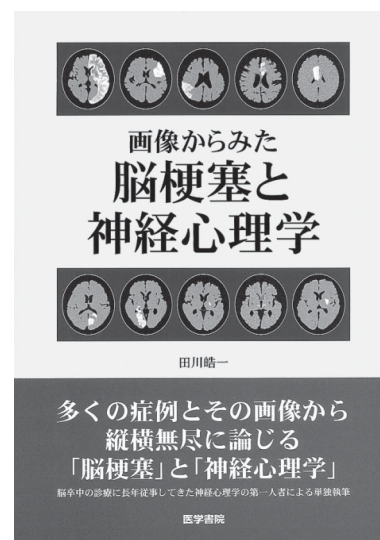
本書は、この「わかりにくい」神経心理学的症候群を「わかりやすく」解説することを目指されたもので、その目的は見事に達成されている。

本書が、なぜわかりやすいかというと、著者が問題の範囲を「血管閉塞症候群（脳梗塞）」に絞っている

からである。もともと神経心理学は脳梗塞の症候学として始まった。例えば、ブローカの発表した失語症候群（いわゆるブローカ失語）がたちまちの間に当時の臨床家に受け入れられたのは、その原因疾患が彼らがよく遭遇する脳卒中（左中大脳動脈梗塞）であり、その症候になじみがあったからであろう。

神経心理症候群それ自体から勉強を始めると、敵が心理症候だけに、わかったようなわからないような、なんだか雲の中にいるような気持ちになってしまうが、病巣から勉強を始めると、敵は極めて具体的なものとなり、格段にわかりやすく、頭に残りやすい。膨大な自験症例から選び抜かれたMRI画像がふんだんに提示されており、いっそう理解を助けてくれる。

本書のわかりやすさは文体にもある。全編、講演口調なのだ。田川先生の語り口は滑らかで、しかも自信に満ちている。思わず引き込まれてしまう。通常の教科書なら事実が羅列してあるだけだから、つつい注意が散り、気がついたら他のことを考えているのだが、本書は違う。集



中して読み進むことができた。

読んでいてうれしいことは他にもある。随所で、病巣との関係があいまいな症候や、定義のあいまいな症候群について、はっきりと、ここはよくわかっていないようだとか、私はそうは思わないなどと、実に率直にご自身の意見が述べられているのである。読者は、あ、この問題ははっきりしていないのだ、とか、あ、この問題はやっぱりおかしいのだ、などと大いに納得されるのではなかろうか。

本書は、ぜひ読み通されることをお勧めする。読み通せるように実によく企んである。この企みに乗せられて、ずいずいと読み通せば、これ1冊で、脳卒中臨床で遭遇する多様な神経心理学的症候群の全体像を把握できるようになっている自分を発見するであろう。そういう素晴らしい本である。

B5・頁280 2015年5月

定価：本体8,000円＋税

[ISBN978-4-260-02196-8]

医学書院刊